



月に集う

つきまちとう
～月待塔が伝える地域のつながり～



曲輪田横久根
「廿三夜 弘化三丙午
仲秋吉日」



上高砂
「廿三夜 天保十二辛
丑年八月 講中」



野牛島 桃岳院
「月待供養 施主五人」



秋山 熊野神社
「信心講中 万延元年庚申九月吉日」



落合 八王子社
「廿三夜」



上高砂
「二拾六夜 愛染王供
養塔 安永六戊年 七
月日講中」



西新居
「大正五年六月西
新居三夜講中」



下高砂 神明神社 「造三夜月待供養
宝永七庚寅年小春吉祥日當所在住
穴水生民 帰命頂来大日如来」

六科 随心院 如意輪観音
「寛政四年壬子月朔日 施主 講中」



上高砂上村
「廿六夜 嘉永六癸丑年八
月吉日」

毎日通る通学路、夕暮れ時の散歩道、初詣や夏祭りでお参りする神社やお寺。その片隅で「廿三夜」と刻まれた石塔に出会ったことはありませんか。「廿三夜」は月齢の二十三夜を意味しています。この石塔は、かつて市内でも行われていた月待講を記念して建てられたものなのです。

月待講とは十三夜や十五夜など決まった月齢の日に人々が寄り合い、神仏に祈りを捧げ、仲間とともに飲食しながら月の出を待つ信仰です。それぞれの月夜には特定の神仏が結びつけられていました。例えば十九夜と二十二夜には如意輪観音菩薩、二十三夜は勢至菩薩、そして二十六夜は愛染明王。特に二十三夜の勢至菩薩は、あらゆるものを知恵の光で照らして苦を取り払うとされる仏様で、月の化身とも考えられ、人気を博しました。市内でも、残された月待塔の数から考えると、二十三夜の月待が圧倒的に多かったことがわかります。

さらに二十二夜の如意輪観音は女性の守り仏と考えられ、女性だけの月待講も行われました。現代風に言ってみれば、真夜中まで月を待つ女子会。仲間の家やお堂に集まって、おしゃべりしながら食べ、飲み、月の出を待つそれぞれの願いを月に託したのでしょうか。月待は講の仲間が集まり、互いの絆を深めるイベントでもあったのです。

市内の月待塔に刻まれた年号から、下高砂の造三夜月待供養塔の宝永7年（一七一〇）が比較的古く、西新居の廿三夜塔が大正5年（一九一六）と新しいことがわかります。少なくとも百年前の大正時代までこうした信仰が続いていたのです。

日常の風景に溶け込んでいる石仏や石塔には、かつて月を眺めて祈りを捧げ、仲間と語らいながら親交を深めてきた人々の姿が宿っているようです。江戸時代に流行した月待講は今ではほとんど見られなくなりました。しかし現代でも、全国でさまざまなお月見イベントが開催されています。月の魅力に惹きつけられた人々が集い、人と人が結びつけられているのは昔も今も同じなのかもしれません。

写真／文 文化財課

※月齢：月が見えなくなる時(新月)を0として、そこから経過した日数。十五日前後で満月となります。